



2020年8月号
第402号
bestopia.jp

パリ通信
第104号

パリ通信を毎月執筆してくださっている古賀順子さんのご母堂が逝去されました
ご冥福をお祈りいたします。

北里柴三郎 年代記・第4回（完）

1910年（明治43年）57歳

緒方 正規教授在職25年記念祝賀会における北里柴三郎の祝辞

北里柴三郎と緒方 正規は同郷で、同期生として同じ学校で学んだ間柄だった。緒方 正規は中途退学して先に東大を出た。北里柴三郎はマンスフェルトの通訳をして上京が遅れた北里柴三郎が内務省に入局して、目標を決めかねていた時期に緒方 正規はドイツ留学から戻り衛生局東京試験所の責任者となり、北里はその下について細菌学の手ほどきを受けた。その後の北里の留学にも援助してもらった。そのドイツ留学中に北里は緒方 正規の脚気細菌説を全面否定する論文を発表した。このときから東大派は北里を恩知らずとして非難して嫌悪、排斥するようになった。

4月16日は緒方 正規教授在任25年記念祝賀会」が開催されることになり、巷の不仲説を乗り越えて出席して弟子の代表として祝辞を述べた。格調高い名演説として有名である
要旨①先生の薫陶を受け最初の弟子として同じ道を歩むことになった。学術上に於いては先生と意見を異にし衝突もし、正々堂々と君子の争いをし、先生の尊厳を冒したこともあり、今日この機会に謹んでお詫び申しあげる。多年気がかりであったことを吐露している
②緒方教授の業績を賞賛して「先生は我が国に実験医学というものを導入して、後進にその学問の方針を示された。このような着眼された先生を戴いていることは門下生として大いに誇りとしている」

先輩を賞賛し、学問上の争いと私的な感情とをキッパリ分離する姿勢を示したものであった。しかし、争いは陰に陽に世間に伝わってマスコミの種となっていた。

1911年（明治44年）58歳

1、結核予防会の企画を発表する

(1)結核予防を最大の国家奉仕と考える

①明治41年コッホの日本訪問への答礼を兼ねて、国際学会出席のため渡欧し、各国で結核予防が真剣に実施されていることを知り、細菌学者としての最大の国家奉仕は、今や結核の予防であると考え、その知識を普及するための結核予防会の立ち上げを企画した。これに賛同した金杉英五郎が、赤門の青山 胤通を訪ねた。

青山曰く「なに結核の予防だと。そんな話なら北里の所へ持って行け」

東京大学医科大学内では結核予防などは話題にもものぼらなかった。

②北里柴三郎は東京でまず結核予防協会をつくって全国の中心機関となり、それから地方を遊説して地方別に結核予防協会を作らせた。（実践的行動派の人柄である）まだ結核予防法はなかった時代でこの運動は困難を極めた。1913年東京と大阪で結核予防協会ができた。

(2)森鷗外の最初の結核自覚は1892年（明治25年・鷗外31歳）であった。

鷗外が結核を自覚しながら生涯隠し通したことが公になったのは1955年（昭和30年）である。日時まで確定出来る資料がある。結核確認日は1892年10月24日であり、陸軍二等軍医正、最初の妻を離縁して2年（先妻死亡の年）である。確定的と自覚したのは1907年（明治40年）7月18日胸膜炎再発の時である。この年11月13日、鷗外は陸軍軍医の最高の地位である陸軍軍医総監となる。結核が分かると地位は危ない。鷗外は若い時から痰と咳に悩ませていた。先妻は結核で死亡している。鷗外は医者である。北里柴三郎の動きをどんな思いで見っていたのであろうか。政府の対応は消極的であった。（参考文献、小塩節著・随想・森鷗外。青娥書房・初版2020年8月1日）

2、伝染病研究所の内務省から文部省への所管変更の前触れ

(1) 1911年（明治44年）青山 胤通の懐柔策

新橋の料亭「浜の家」である会合があり、北里柴三郎と青山 胤通も招待されていた。会の終わった後、青山（当時東京帝国大学医学大学学長）が突然北里に次のようなことを言ってきた。

「大学（東京大学医学部）に来てくれないか。そうすれば君の希望は何でもかなえてあげる。学長にしろというなら学長になるようにする。僕はそれぐらいのことを考えている」しかし、北里は黙として返事もしなかった。この沈黙には深い意味があった。

青山 胤通は北里の実力、人気を認め、伝染病研究所をまるごと帝国大学医学大学内に包摂するために、北里自身の懐柔を試みたのであった。

(2) 明治26年文部省の屈辱

伝染病研究所を（東京）帝国大学の傘下の置くという試みは、既に別の形をとって行われ失敗していた。それは明治26年に遡る。浪人生活同然の生活をしていた北里柴三郎を見かねて、福沢諭吉が私財を提供して小さな伝染病研究所を立ち上げた頃である。

この小さな研究所（当時30坪）を大日本私立衛生会に寄付してその付属伝染病研究所にしようとしていたとき、文部省は（東京）帝国大学医学大学に伝染病研究所並びに付属病室の設営を計画し、予算34,000円を計上して衆議院の予算委員会に提出した。これは長谷川泰の発言主導によって却下され、資金は北里の方に回された。伝染病研究所をめぐり、文部省（東大教授派・森鷗外ら陸軍官僚）と北里柴三郎は心ならずも戦い抜かねばならない宿命にあった。

(3) 青山 胤通の人事干渉

1894年（明治27年）には、卒業生の争奪戦もあった。北島多一が東京帝国大学医学部を主席で卒業して、北里柴三郎の門下に入る決心をした頃、青山教授（内科担当、大隈重信の主治医）は北島多一に「北里君の所へ行くことにしたそうだね。でも君のためにそれはよくない。北里は今孤立の状態で、あの研究所だって将来どうなるかわからない。君が大学に残ってくれば、洋行もさせてあげるし、何の学科でも好きにやらせてあげる。だからああいう所へは行かないでくれ」と言った。主席で卒業した北島多一を跡継ぎとして大学に残して置きたかったのである。1911年から17年前のことである。

北島多一は北里柴三郎の第一番目の弟子であり、右腕となって力を発揮し、北里の慶應義塾大学医学部創設の推進者となり、北里の死後は所長となり、主事となって活躍した。北島多一の妻は小池正直（森鷗外と東大同期生）の長女であることをここに記しておく。

1912年（大正元年）59歳

(1)6月、原敬への直接談判、嘆願書を提出する

西園寺内閣（第二次）は、日露戦争後の経済逼迫のため、行政及び財政の大整理を目標に掲げた。時の内務大臣、原敬は法務局長官、奥田義人に命じて政策立案をさせた（この案を奥田案という）。

この案に、伝染病研究所の廃止、又は文部省への移管があった。政府は強硬に出てきたので、北里柴三郎は最後の手段として、原敬を私邸に訪ね談判に及んだ。

伝染病研究所は公衆衛生の徹底と伝染病の撲滅を図るために国家に貢献している。内務省が所管してこそ社会民衆のための衛生行政が円滑に進められる。国民の健康、衛生のため研究成果をすぐさま医療に役立てることができる。伝染病予防は教育機関である文部省（学術的研究を目的とする大学）にはなじまない。

伝染病研究所には収益部門があり国庫負担は軽微であると詳細な歳入歳出の計算表を示した意見書をもって談判した。

原敬は「分かった。君の意向は無視しない」と最後に言った。原は実質的に内閣を仕切っていたので、北里柴三郎はこれで決着したと一安心していた。

（原敬は第4次伊藤博文内閣から山県有朋との交渉を賢明な方法で接しながら議院内閣制を確立することを目指し、桂・西園寺の交代内閣の組閣を実質的に取り仕切り、大隈とは距離を保ち1918年9月初めて国会議員による総理大臣になった。その反動で1921年10月暗殺された（参考文献・栗田直樹著・原敬日記を読む・成文堂初版2018年2月20日）

(2)日本結核予防協会の誕生

北里柴三郎の発議で誕生、会頭は芳川顕正伯爵、自らは理事長に就いて、結核予防の講演会や展覧会を開催し、予防思想の普及に務めた。名誉会員には森村市左衛門ら財界人を参加させている。この協会が財団法人となるのが1923年（大正12年）である。

1913年（大正2年）60歳

(1)肺結核療養所の設置等、結核問題で国会が動き出す。

①結核予防に関する建議の提出と可決

富国強兵殖産興業のスローガンのもとで第一次産業革命が起こり、その労働力は農民層からの安い労働者（女工を含む）であり、重労働過労が重なり、壮年層を中心に結核が流行した。

1899年（明治32年）から1909年（明治42年）の10年間で、全国壮年者死亡率の3分の1が結核による死亡であり、肺結核死亡者40万人、その他の結核約80万人と推定された。患者1人当たりの平均療養費は1日70銭、年間総必要経費2億9,000万円、一人当たりの平均生産額を30銭として年額8,700万円、合計約3億円が国庫の損失となる。従って、「この疾病をこのまま放置すると農業も工業も軍隊も全て衰退して無能力になる虞がある」結



核は療法が確立していないため、診断を受けた者は死刑の宣告を受けたと思われる病である。この恐るべき病は、壮年を中心にあらゆる階層・地域住民に蔓延しており、結核対策は経済的にも人力的（労働力・兵力）にも国家の衰退を左右しかねない重大事案であるとの建議が丸尾光春ら議員からあった。可決されたが、政府は予算がないとして具体的な動きはなかった。

②民間では日本結核予防協会が設立され会頭に渋沢栄一、副会頭は北里柴三郎が就任。東京と大阪初め各地に予防の拠点を作り始めた。北里は予防啓蒙のためのパンフレットを作り配布を促した。

「最善の療法より平凡な予防」「文明人は路面に痰を吐かず」「肺病の痰は火なき炸裂弾なり」。この私的な団体は1923年財団法人となり、更に1939年政府機関に吸収されることになる。

③森鷗外は平素から痰と咳に悩まされて、家での食事の時に「箸」は専用として（マイ箸）食後は自分で洗い、自分で管理して、子ども達に伝染しないように、密かに心していたという。

このような国家を越えた活動を全国の医師会を通じて積極的に行う北里柴三郎の行為に政府・東京帝国大学医学大学の教授陣は嫉妬したり、怨んだりしていた。

1914年（大正3年）61歳 10月迄の動き

伝染病研究所の内務省から文部省への所管変更と北里研究所の創立

(1) 青山 胤通と文部大臣・一木喜徳朗の密談

1914(大正3年) 9月24日前後、文部省の大臣室

大臣 「伝染病研究所を文部省に移管することにした」

青山 「それは、本当ですか」

大臣 「嘘をついてどうなる」

青山 「失礼しました。大臣。あまりに重大な話をいきなり聞かされたので動転しました（青山は既に2月に内閣書記官の江木翼から知らされていた）」

大臣 「そうか。で、どうかね。伝染病研究所の移管に協力してもらえるかね」
 青山 「協力も何も――、ありがたい話です」
 大臣 「そう。それならこっちも助かる」
 青山 「大臣、この話はもう動き出しているのでしょうか」
 大臣 「そう考えて結構だ」
 青山 「そうですか。もう動き出しているのですか」

大臣 「この話はまだ秘密事項だ。ただ、青山先生は大隈総理の主治医であられる」（青山が大隈重信の主治医を引き受けて既に20年近くになる）
 「いずれ、総理からお話があるでしょうが、伝染病研究所を文部省に移管するのはもう既定路線だ」と一木は断言した

この一木喜徳朗は山県有朋の懐刀といわれた秀才で明治34年桂太郎内閣の法制局長官、大隈内閣では文部大臣の後内務大臣も歴任する大物の一人である。
 青山の脳裡に北里との様々の因縁と確執が甦っていた。伝染病研究所が大学管理下に入れば、一気に憂さが晴らされる。それも間近に迫っている。胸中やいかに！
 しかし、青山には一抹の不安があった。
 北里柴三郎は東京医会と帝国聯合医会の会長となり、前年には日本結核予防協会の初代理事長になっている。また、北里柴三郎は全国に公衆衛生の普及活動のために数多くの講習会を開催し、府県の衛生課長は大部分が北里の門下生であった。府県の医師会と衛生課長は緊密な関係にあり、開業医の勢力は東京帝国大学ではなく北里柴三郎に傾いていた。北里外しには世間から相当な非難があるのではないかと思ったが、積年の恨みに、その思いは片隅に追いやられた。

(2)青山 胤通と長與又郎の学長室の会談（10月4日）

青山「じつは、近々伝染病研究所が文部省に移管することの運びとなる」
 青山は一木大臣との会話を手短に披露した
 又郎「それは――本当ですか」
 青山「本当だ。私も信じられず大臣に聞き返して、叱られたほどだ」
 又郎「そうですか」
 青山「いよいよだよ、長與君」「これで北里の手から伝染病研究所を奪い取り――」
 「いや、望ましい場所に移して、正常に戻すことが出来る。そこで相談なのだが、移管後は君にいろいろ折衝してもらいたい」
 又郎「折衝といいますと？」
 青山「移管となれば北里はあの性格だ。当然所長を辞めるだろうし、いやなら辞めてもらう。問題はその後だ。残った所員は動揺しているはずだ。
 もとのように研究できるかどうか。
 そのあたりの不安をのぞくために説得して欲しいのだ」
 又郎「残った所員と言われますが――北里先生が辞めたとして、果たして他の所員は残りますかね！」

青山「それは残るだろう。全員留任だ」と断言したが、しばらくして

「ちがうのか」と不安げに聞き返した。

又郎「北里先生が辞めたなら、北島氏以下、各研究員も辞めるのではないですか」

青山「まさか。移管されただけで、これまでの研究所の組織や方針に何ら変更はない。そのことを強く訴えればいい」

又郎「それでも辞める者はいるでしょうね」

青山「仕方ない、去る者は追わずだ」

又郎「多数が辞める場合を考慮しておいたほうがいいででしょうね」

青山「連中は辞めてどうする。浪人になって逼迫するのがおちだ」

又郎「それは彼等が考えることです」

青山「そうか。それならこちらも条件を出す。移管と同時に、部長職の研究員を教授か助教授に任命する」喜んで残るだろうと青山は笑った

「わたしは誰も北里についていかないと踏んでいる。なぜなら、北里の横暴と傲岸不遜は目に余る。それも年を追ってひどくなっている。人望のかけらもない。そう思わないか」

中略

又郎「北里先生の横暴を許す空気に浸りながら、むしろ自由に研究しているようにみえますがね」

青山「では、何がそんなに所員を惹きつけているのだ」

又郎「分かりません。ただ、権威主義に陥っていないことは確かだと思います。組織が硬直化していません」北里柴三郎には帝国大学の教授たちにはない親しみや温情があるだろうと想像した。又郎は父長與専齋と北里柴三郎の関係を身近に見て北里の人柄を理解していたのである。（北里柴三郎にとって長與専齋は5大恩人の一人である）

こんな会談中に内閣では伝染病研究所を文部省に移管する閣議決定がなされた。

(3)北里柴三郎と北島多一の会話

10月5日朝8時に出勤した北里柴三郎は「北島を呼べ」と大声で叫んだ。

北島「どうされました」

柴三郎「この伝染病研究所を文部省に移管するという」

北島「今、何と仰いました」

柴三郎「伝研を、この伝染病研究所を文部省に移管するというのだ」

北島「まさかー」

柴三郎「わしに一言の相談もなく、こんな赤新聞（萬朝報）に載せおって」

北島「しかし、所長。移管の話は原大臣のとき決着がついているではありませんか」沈黙と中略

北島「所長、この話が突然持ち出されたのは裏がありそうです。陰で画策した者がいるはずです」

柴三郎「それは分かっているだろう」

北島「青山教授ではないですか。青山教授は大隈総理の主治医をしている立場を利用して移管話を持ち出したのです」

柴三郎「そう思うか」

北島「それ以外に考えられません」

柴三郎「やはり、そう思うしかないだろう」

それから、しばらくの話し合いがあった。事務員が所長室に現れ「所長、今、官邸から電話が入りました。大隈総理が会いたいとのことです」と告げた。

官邸で大隈総理から「文部省移管が政府の決定である」と伝えられた。有無を言わさぬ決定であった。翌朝、東京朝日新聞の4ページの最下段に記事が載った。

(4)北里柴三郎と 田端 重晟の会話

10月6日一睡もしなかった翌日早く養生園に田端を訪ねた。

しばらくの話し合いの後の沈黙

「政府の意見なるものは何時変更を見るやも知らなければならない、風の吹きようで政策が変わる。為政者の都合で動くのが「官」である」という福沢諭吉の助言を二人はそれぞれ思い出していた。そして、田端が話し始めた。

田端「博士はどうされるおつもりです」

柴三郎「決まっている。辞める」

田端「辞めてどうされます」

柴三郎「そんなこと、考えていられるか」

田端「そうでしょう。でも、博士。博士にはここ、養生園があるではありませんかここを充実させ、大きくしてください」「わたしが心配するのは所員の皆さんです」

柴三郎「所員には迷惑をかけない」

田端「博士、移管が決まって研究員たちはどうでるでしょうか」

柴三郎「どういうことだ」

田端「辞めるか、残るのか」

柴三郎「もちろん、残ればいい」北里はそれが当然だと考えていた。各研究員は残留して研究を継続すればいいのである。所員たちに影響はないと踏んでいた。

田端「研究員はみなさん、きっと、辞めるでしょう」と見通していた

柴三郎「莫迦な。なぜだ」

田端「博士を慕い、尊敬していますから」

柴三郎「それは……それは困る。辞めてどうする」

田端「さて、それは分かりませんが、博士についてくるのは確かだと思います」

柴三郎「困る。わたしには研究の場など与えられない」

田端「そうでしょうか」謎めいた台詞を吐いた

柴三郎「どういう意味だ」

田端「博士、わたしは昨日、萬朝報に移管の記事を見たとき、来るものが来たと思うと同時に、福沢先生を思い出しました」

柴三郎「そうなんだ、田端。わたしも同じだ。とうとう福沢先生の言われていた通りになってしまった」

田端「福沢先生の先見の明をあらためて感じました。しかし、先生は同時に、常々、不測の事態に心し、財を貯めておくように言われていました」

田端が養生園設立と同時に送り込まれたのは、この事態に備えてのことであった。

福沢は人物的に信頼でき、経理、経営の力のある人物を北里柴三郎に付けたのあった。

田端「失礼ながら、この田端、福沢先生のいいつけを守ったつもりです」

そう言って、田端は部屋の片隅に置かれた棚の引き出しから書類の束をつかみ、柴三郎の前に置いた」

田端「これは会計帳簿です」「現在、養成園の積立金はこれです」

柴三郎「どのくらいあるのだ」「三十万……」信じられない気持ちで読み上げていた。

巡査の初任給が15円の時代だった。（一万倍として30億）

柴三郎「よくこれだけ蓄えられたな」田端の才覚と推薦した福沢諭吉の鑑定眼に敬意を払わざるを得なかった。

田端「博士。この資金を元に新しい研究所を作られたらいかがですか」

柴三郎「新しい研究所か……」思いがけない展望に胸が躍った。福沢諭吉が推奨した独立自尊なのだ。

田端「土地は余っています」養生園の裏手に元は沼地ながら田淵が機会ある毎に買っていた約5000坪があった。

柴三郎「やるか。帝大連中も驚くぞ」「田端、わしは負けんぞ」

(5)北里柴三郎と北島多一の会話

その日（10月6日）の午後、北里は伝染病研究所の赴いた。

所長室では北島が控えていた。

北島「所長、お話があります」

「話がもう変更にならないのでしたら、わたしは所長とともにここを辞めます」直立不動で宣言した

柴三郎「何い、辞めてどうする」

北島「考えていません。しかし、ここに残る気はありません」

柴三郎「しかし、北島。移管となってもこの伝染病研究所はそのまま残る。だから、君は残留して研究を続けろ」

北島「それでは、意味がありません」

柴三郎「どうしてだ」

北島「わたしは所長と共に研究できるからこそ、この伝染病研究所に来たのです。北里柴三郎のいない研究所では意味がありません」北島は殆ど涙声だった。嗚咽で肩が震えてとまらない。

柴三郎「北島……」柴三郎は次の言葉が出なかった。不意に涙が止めどもなくあふれてきた。泣いた。所長の身分を忘れて声をあげて泣いた。柴三郎が初めてあげた雷のような泣き声だった。

柴三郎「分かった、北島、好きなようにするがいい」

北島「所長。ありがとうございます。」と柴三郎の手を握った

柴三郎「北島、わしにも話がある。逆襲だ」柴三郎は握り返した

北島「何をするのですか」

柴三郎「新しい研究所を作る」柴三郎は午前中、田端と立てたばかりの計画を話した。

北島「起死回生ですね、所長」歓喜の声をあげた

柴三郎「だが、一つ気がかりなことがある」

北島「何ですか」

柴三郎「新研究所を建てたとしても、それを維持しなければならない。将来を視野に入れて財源を確保する必要がある」養成園の収益だけでは心細かった。

「血清とワクチンを売るのが得策だが、それには警視庁から製造許可をとらねばならない」

北島「所長、それはこの北島に任せてください」

柴三郎「頼む。邪魔が入って認可が遅れたり、取れなかったら、こっちの打撃も計り知れない」

北島「一瀉千里で認可をとってみます」

柴三郎「認可はわれわれの命運を握っている。新研究所を成功させるためにも、この計画は内密にしてほしい」

北島「もちろんです。早急に動きます」そう言い残して北島は部屋を出た行った。

(6)北里柴三郎と長與又郎との会談

10月11日（日曜日）午前、柴三郎は文部省から迎えが来て、一木大臣を訪問した。慰留を懇願されたが、北里は移管に激しく抗議をして、辞任の意志を明確にした。慰留に失敗した一木大臣は今度は北島多一を呼び、新所長に就くように協力を要請したが、それも失敗した。

午後6時、長與又郎は柴三郎の自宅を訪問した。

4年前の結婚に際して媒酌人をしてもらった。（長與又郎の父長與専齋は柴三郎にとって恩人である）

又郎「聞くとところによりますと、先生は移管が決まったなら、伝染病研究所所長を辞任されるとか」

柴三郎「当然だ。伝染病研究所を育てたわたしに一言もなく、赤新聞に載せて事足りりと考えている政府について行けない」

又郎「加えて聞こえてきますのは、先生ばかりか、研究員のみなさんも辞めるかも知れないとか」

柴三郎「そこまでわしは関知していない」

この時北里は帝大派の青山教授が慌てているのを感知した。

又郎「先生ばかりか、研究員のみなさんが辞めては伝染病研究所は成り立ちません。ここは一つ先生に辞任を思いとどまっていただき、伝研に残って頂きたいのです」

3時間に及ぶ説得に応じることはなかった。

北島多一にも同じような慰留工作がなされたが謝絶された。

(7)10月14日、勅令221号が官報に公布され、移管が公表された。

柴三郎が官報に眼を通してしていると北島が一枚の紙を持って所長室に現れた。いつに似合わず頬がゆるみ、目も笑っている。

柴三郎「どぎゃんした。北島」

北島「所長、血清とワクチンの製造許可が取れました」

柴三郎「何い、もうおりたとか」。官報を投げ捨て認可証を穴の開くほど見つめた
「財源ばできた」

(8)青山 胤通と森鷗外の会談

10月14日夜、青山は千駄木、団子坂上の森鷗外宅、通称「観潮楼」を訪ねた。

この頃、森鷗外は陸軍軍医総監・陸軍省医務局長を務める傍ら文筆活動も盛んだった。山県有朋との懇意になって月一度椿山荘での歌会で会っている。山県有朋は政界復帰を狙っていた。山県有朋は大隈の人気を嫉妬し失脚を望んでいた。

青山は大隈の主治医であった。しかし森と青山は莫逆の友であった

青山は一連の窮状を訴えた。森は総力をあげて救いたいと考えた。

血清とワクチンの製造ができる部下がいる。彼等を新伝研に派遣するという約束をした。

森にとってはいとも簡単なことであった。

加えて森鷗外は「おれのところにいる小池正晃は北島多一の妻の弟だ（小池正直の長男）その小池を動かして、北島の翻意を引き出してはどうかと思っている」とそそのかした。

後日北島多一は一人で森鷗外を訪ね、丁寧に、新所長の席を断った。（10月21日）

(9)新聞報道で一般市民はこぞって柴三郎に同情した

10月15日各新聞は一斉に伝研移管を報じた。それから連日、伝研移管騒動は一大社会事件として世間の耳目を集め、世界大戦の戦況よりも関心を集める前代未聞の記事となった。19日柴三郎は大隈総理に辞表と診断書を提出した。

(10)10月20日午後1時所員一同に惜別の辞を語る

「研究所は去る14日突然移管され東京帝国大学医科大学に付属して各科に分割されるはずである。かくのごときはよく諸君の知れるがごとく、余が多年の主義たる総合研究と相容れざらもので、いまさらこれに向かつて多くを言うを要しない。余は20年来、諸君の奮闘努力により、力をつくして伝染病の研究をとげ、国家に対して報恩の万分の一を捧げてきたが、いまや世界の大勢に逆行し、研究所存立の意義を破壊する政府の措置にあい、ここに研究所を去らざるを得ざるに至ったのは、情においてはまことに忍び難きものあるも、公人としてまた学徒として固く抱ける主義信念にそむく能わざるを諒とせられたい。余は昨日断然職を退いた。しかしながら諸君はなお春秋に富む。有為なる前途を誤らざらんがために、進退のことは宜しく慎重に考慮し、一路研学をもって国家のためまた学問のため、ますます奮励せられんことを望む次第である」

涙をこらえながら一気に話し終わった。柴三郎は静かに壇をおり、前方を見据えたまま会場をあとにした。部屋に残った所員一同、あちこちからすすり泣きの声がもれた。

そのとき、北島が壇に登った。あふれてくる涙を拭いもせず一同に呼びかけた

「諸君、われわれは所長の深い恩顧を受けて久しい。そして、先生と進退をともにし、信じるところを行わんと決心した。（われわれとは、19日話し合った北島多一、志賀潔、泰佐八郎、梅野信吉、宮島幹之助、照内豊、草間滋の技師）

しかるに、ただいま先生の御垂示のごとく、諸君は少壮にして長き前途を有せらるるにより、宜しく慎重に進退すべく、願わくば留まって一層、研究勉学されたい」

一同はしばし声もなくむせび泣いた。しばらくして

「北島先生はどうされるのですか」若手の助手が手をあげて聞いた。

「北島先生も大先生がご指示されたようにここに留まって研究されるのですか」

北島は虚を突かれた。

北島「いや、わたしは所長とともにここを辞める」

若手の助手1「それは、先生、あんまりです」

若手の助手2「そうです。先生一人ずるいではありませんか」

若手の助手3「われわれが研究を志して伝研にきたのは、所長と部長の諸先生がおられるからです。いま、所長が辞め、そして北島先生が殉ぜられると聞くと、われわれがここに残る意味はまったくなくなります」

北島「辞めてどうするのだ」

助手達一同「所長についていきます」

この光景は北里柴三郎と北島多一との会話とそっくりである。

かくて翌21日所員一同は辞表をとりまとめ北島に提出し、政府に届けられた。

困った政府は諦めることなく北里との妥協を模索し、一本文部大臣は再度北島多一と会談、拒否されると、志賀潔の懐柔にまで乗り出した。全て失敗に終わった。

このことを予見していた人がいた。それが 田端 重晟である。

10月21日所員一同辞表を提出する。結局残ったのは書記5人と看護婦、下働きの一部だけだった。11月6日全ての退職が認められ、この日から「立つ鳥跡を濁さず」の精神で引き継ぎが始まった。

後に北里柴三郎はこの日を新研究所創立日とした。

(11) 10月27日慶應義塾大学より申し出があった

福田真人著「北里柴三郎」（熱と誠があれば）によると、「10月27日慶應義塾の方から、独自の伝染病研究所を、塾の医学部新設と併せて行つては如何という申し出があった。これは前後から燻っていた計画で、6年後の大正9年に慶應義塾大学に医学部が創設されることになる大きな一つの前哨戦であった」と記されている(p291-292)

尚、同著には他の伝記にはない次の短い文章がある。

この伝染病研究所移管の結末において、「しかし、不幸なことに北里は公費横領の嫌疑をかけられ、審問書もだされる始末だった。これはどうやら事務官の一人が個人的にしたことというので解決したが、世間を騒がせたことには変わりはない。伝染病研究所には自殺者もでたのである」（p 294～295）

(12) 政界を巻き込んだ怨念とは

北里柴三郎が東大医学部（総称）から睨まれ嫉妬、怨恨に至った原因は何であったかを振り返ってみる。

①青山 胤通との確執は明治9年から10年頃、二人が東京大学医学部に共に学んでいたとき、実験で青山が少しばかりの失敗をした瞬間に北里柴三郎が「クスッ」を笑ったという

ことが始まりのようである。その後わだかまりは周囲を巻き込み拡大していく中で明治27年の香港ペスト調査団に共に派遣され、青山はペストに罹患し北里はペスト菌の発見の偉業を達成した。青山の解剖の働きが無視された。

しかし、青山教授は優秀な内科医であり、大隈重信の主治医となる。

②緒方 正規との確執は北里柴三郎が明治21年5月ドイツに留学中に緒方 正規の「脚気細菌説」を批判する論文を発表したことに始まる。緒方 正規は明治17年留学から戻り、18年には北里柴三郎に細菌学の手ほどきをし、北里柴三郎の留学に際してはコッホ研究所のフリードリヒ・レフレルに紹介状を書いてくれた恩人である。

緒方 正規と森鷗外とは「脚気細菌説」で同調し親しい関係にあり、北里柴三郎は敵視されるにいたった。森鷗外は陸軍医として最高に地位に出世し、その立場から北里柴三郎を攻撃した。

森鷗外は山県有朋の主治医であった。

(13) 山県有朋とは

長州藩、軍人から政治家の道を歩み「武断家」と目され、強い権力意志をもった手堅い現実的政治家で、軍部はじめ、政界・官界に巨大な派閥網をつくりあげた。明治時代末期にはその勢力は伊藤博文をしのぎ、大正時代にはいっても政党勢力に対抗して、超然内閣を誘導し、藩閥・官僚勢力の頂点に位置していた。次期総理大臣を決定したり総辞職させる力を持っていた。

長州藩も大きく2派に分けると伊藤博文、井上馨、西園寺公望等の政党政治を目指すものと、山県有朋の傘下にある代々の首相、桂太郎ら藩閥政治を守ろうとするものがある。森鷗外は後者に近い。東京大学医学部出身の森鷗外は陸軍と帝大医学者との関係を深め医学界にも政治的影響を強める媒介的働きをした。

原敬は山県有朋の強い影響の嵐ふくなか、外見的に山県の賛同を取り付け、第4次伊藤博文内閣頃から代々の内閣の行政をリードする働きをした。原敬はなぜか大隈重信には距離をとっていた。その大隈内閣のときに、伝染病研究所の文部省移管が実行された。北里柴三郎は原敬とは昵懇であった。

(14) 11月5日内務省を退職（依頼免本官）同日、北里研究所を設立、

翌日から引き継ぎ作業が始まり11月7日完了した。

北里は新しい研究所の独立宣言をした。「19世紀の医学界において精華を極めたものは微生物学なり。（長い中略） 学問の独立と権威を維持して研究所を設立する」

福沢諭吉から教授された独立自尊の精神を貫徹したのである。齢61歳。隠居をする年齢であった。そして人生の「林住期」に大きな独自の花を咲かせた。

「同士同僚の希望により、研究所の歴史に鑑み、余の名を冠して北里研究所と名づくこととせり」

北里柴三郎は師に恵まれた人であった。18歳で出会ったマンスフェルト、就職から留学までの面倒を見てくれた長與専齋、6年間指導を得たロベルト・コッホ、留学から帰国して浪

人同様の生活の中から無償の救いの手を伸ばしてくれた福沢諭吉どの一人を欠いても今日の北里柴三郎とその偉業は存在しなかった。

(15)田端 重晟（たばた しげあき）の存在

独立自尊の精神を実現できた北里研究所の設立を可能ならしめたのは 福沢諭吉が送り込んだ田端 重晟（たばた しげあき）の存在であった。福沢諭吉の腹心と言われた逸材を惜しみなく土筆ヶ岡養生園に送り込み、北里の右腕としてささええた忠実且つ聡明な経理マンであった。複式簿記に習熟して、正規の簿記の原則に従って帳簿を管理し、納税義務を果たし、着実に預金を増やしていった。20年に渡り日本初の結核療養所として養成園を拡充発展させ、福沢諭吉の夢を実現しつつ、北里の独立のための資金を準備したのが 田端 であった。預金は30万円と言われている。

翌年に完成する北里研究所の総工費は20万円であるから、その預金の多さは驚愕である。

1914年11月から1915年12月迄の1年間、北里柴三郎についてきた北島多一ら7人の技師（残留すれば東京帝国大学医学大学教授の位）を初め、技手10人、嘱託13名等総勢100名を越えた。その人々の1年間の生活費を北里は補助負担したことだと私（筆者）は想像する。この詳細は 未公開の田端 重晟の手記にあると言われている。親分肌の気質からして想像は難くない。

この一連の出来事は当時の新聞に詳しく、時には戦争記事を凌いでトップ記事となって世間の愁眉を集めた。同窓生が動いた。1088名の伝染病研究所で講習をうけた同窓生から48,000円の寄付、そして何の縁故もない一般の市民篤志家99名から4500円余りの支援が寄せられた。

1915年（大正4年）62歳

(1)1月10日、慶應義塾での講演

慶應義塾では毎年1月10日福沢先生誕生記念会が開催されるが、この年は北里柴三郎が時の塾長鎌田栄吉に招かれて「学問の神聖と独立」と題する講演をおこなった

要旨「21年前の明治25年独逸留学より帰国したとき、先生に援助の手を差し伸べて頂いたときから伝染病研究所ができ、すぐに大日本私立衛生会に寄贈を許したいただき、更に国立になるように勧誘されたとき、福沢翁に相談したところ『一切を北里柴三郎に任せるというなら政府機関となっても構わない。しかし、政府というものはいつ気変わりしてどんな事になるかも知れぬから決して油断せず、足下の明るい内に資金を貯めなさい』と勧められた。そのときハテナと思ったが20年たった今、省みると先生の先見の明に感じ入った次第、お陰で昨年の伝研移管問題に遭遇し、自分の所信によって伝研を断固として辞任した。これは、福沢先生から精神的感化を受けましたところで、人間の独立自尊は茲にあると考えたのであります。福沢先生がつけてくださった直弟子 田端 重晟氏の非常な努力により、多少の貯えもあった、私がかねて福沢先生から受けておりましたところの精

神的教育、即ち独立不羈と言うことを実行し得たものと自ら誇っている次第でございます。中略

学問の神聖は、如何なる暴政府と雖も、如何なる人でも圧迫することは出来ぬ。自分の学問の主義方針の為には威武にも屈せず、富貴も淫する能わず、貧賤も移さぬということの出来たのは、全く先生のご教訓の賜であると存じます」（長木大三著「北里柴三郎」 p 111）

この時慶應義塾には医学部はなかった。鎌田栄吉塾長によって、北里招聘の路線が引かれつつあった。

(2)竣工までの研究所はどんな様子であったか

仮の研究所は養成園の病室8畳の間を5〜6室とそれに畳敷きの講習会室と若干の付属室があった程度であったが、研究員はワクチンの製造、実験、研究に余念はなかった。部長も若手もその畳の上にあぐらをかいて来たるべき夢を語っていた。

整理整頓も行き届かない時に、野口英世が帰国してやって来た。この時の野口はロックヘラー研究所員となり素晴らしい業績が認められ世界に羽ばたき、前年ノーベル賞候補に挙げられていた。彼は明治31年月給13円で伝染病研究所に入所がやっと認められ2年足らずの勤務中にアメリカのジョンズ・ホプキンス大学病理学教授、サイモン・フレクスナーの知己を得て渡米し、北里流の働きぶりで認められ出世の機会が与えた。伝染病研究所に入所できていなければ、このような機会もなかったわけであるが、野口の積極果敢な姿勢で自らチャンスを作り出したのであった。

このような混乱した仮の研究所を見て野口は何を思ったことであろうか。

「諸君、ぼくは諸君の同僚だよ」と励ましたと記されている。

工事は順調に進み11月に竣工するが、それまでも研究業務は一日も休むことなく続けられ、100名余の職員の生活を守った（多くは北里柴三郎個人又は養成園の積立金からの出費であったと思われる）

竣工は11月であるが、その半年前に北里は志賀潔と薬剤師の土谷桂一郎を伴って30有余年ぶりに故郷（熊本県小国町）の土を踏んだ。私財1万円を投じて図書館を建て寄贈した。木造平屋建洋風建築、36坪、蔵書1500冊、北里文庫と称され、今も「北里柴三郎記念館」の敷地に保存されている。

(3)北里研究所の竣工

工事は順調に進み1915年11月には竣工し、恩師ロベルト・コッホの誕生日である12月11日開所式が挙行された。

田端 重晟が時に応じて土地を買い増して、敷地面積2500坪、建物総面積770坪、総工費20万円余であった。外観はコッホ研究所に似た作りで、明るいうす緑色の外板壁に矩形の窓が等間隔にならんでいる。この研究所の本館は現在明治村に移築保存されている。開所式には2000名が参列したが、政府と大学関係者は一人も出席しなかった。

主な出席政界人は清浦奎吾、政友会総裁・原敬、後藤新平、慶應義塾塾長鎌田栄吉、医学博士・三宅秀、門弟代表・高木友枝が祝辞を述べた。

式典の後は隣の福沢別邸にて園遊会が開催され夜8時に閉会となった。

北里の言行一致の実践は、翌日同じ園遊会場に家族を招待して、所員と養成園の職員、家族、子どもが集まり、開所を祝ったことである。大所帯にもかかわらず、建設までの1年間不自由な思いをさせてきた家族への慰労も忘れていなかった。奥深い配慮は特筆すべきことである。

新しい研究所は人材にも恵まれ順調に「国民の健康」を幅広く守る使命を果たし続けている。北里研究所の沿革については<https://www.kitasato.ac.jp/jp/about/overview/history.html>を参照されたい。

1916年（大正5年）63歳

(1)11月20日大阪毎日新聞に寄せた「慶應義塾医科大学の抱負」

鎌田栄吉塾長の依頼を受けて医学部長に就任する前年、その抱負を寄稿している

要旨「日本に初めて西洋文明が輸入されたのは医学の為とみてもさしつかえないと思う。福沢先生は大阪の緒方洪庵適塾で医学を学ばれたことがある。（当時はまだ）医学教育が不適当な事多く改良の余地が急務であった。これからは完全な教育を受けた医師が必要である。慶應義塾大学にはなるだけ教員は専門の知識をそなえた者をもって当てたい。（現今の）医学教育の弊害は、受け持ちの病人は部外の人には手を付けさせぬことである。官立の医科大学には殊にこの点が目立つ。これは統一を欠くということになる。慶應義塾医科大学ではこの弊を矯めることにしたい。一人の病人についても互いに融通して研究することを第一条件としたい。このように教育すれば学生も世の中に立ちたる後役に立つ者を作ることができる。如何に医者を作っても開業の暁には、新しい学問に遠ざかる。これもまた弊害である。一度学校を出れば日進の医学に近寄ることは困難である。設備に於いても是までの日本の開業医の欠点を補いたい。それは種々の設備を整えてX線だとか化学の研究の設備だとか細菌学だとかの設備を整えて開業医の便宜をものはかることとしたい。尿や便や血液等を試験させる。このように自由に開放し研究せしめるのが、之を全国の医者に提供して進歩を助けたい。官立の学校は閉鎖主義である。医学に伴って化学の研究をやる。薬のごときは医者のみではできぬが、化学者のみでもできぬ。製薬者に医師が参加してこれを造ることをせねばならぬ」

この記事は大正5年のものである。

医学領域の各科分立の弊を突き、患者中心の総合医療の重要性を指摘し、開業後の再教育の必要性に触れ、開業医への医療機関の開放協力、医学と周辺科学との協同研究にまで言及している。

(2)12月、慶應義塾医科大学の認可がおりる

北里研究所を建て、齢62歳を過ぎていたが、まだやり残していることがあった。福沢諭吉先生への恩返しである。北里柴三郎は恩返しは慶應義塾に医科大学をつくることであると考えていた。それは「福沢先生の遺業は依然としてわが眼前に存し、先生の遺訓は歴然と

して余が脳裡にあり。余不敏といえどもまたその遺業を守り、その遺訓を躰し、切磋研究をもって万一の報恩を期せんとする」19011年2月の弔辞にも伏線がひかれていた。紆余曲折を経て義塾内の意見もまとまり、承認は下りたが土地の取得をめぐる再び行政との対立が生じたのである。

認可が下りた医科大学には12000坪の土地が必要であった。候補地として四谷区信濃町の軍用地が上がった。競争相手は四谷区（東京市長は奥田義人で伝研の移管や廃止を唱えた急先鋒、北里柴三郎には忘れられない人物である）であった。区は浅草六区に匹敵する盛り場を造る計画を持っていた。住民も病院には大反対であった。

「また、奥田か」北里柴三郎は舌打ちをした。

しかし、四谷区には土地を取得する財源がなかった。一方慶應義塾側には募金ですでに100万円を集めていた。土地代金は90余万円であった。土地は取得できたが、次なる問題が又出てきたのである。信濃町は当時、砂の街と言われるほどの砂埃が舞い上がる劣悪な環境だった。元々反対派の大学関係者の人達は「砂埃の中では、医学部も病院も不向きである」と言って反対した。ところが、北里柴三郎には最終的には運がついていると言ってよいほどにラッキーな知らせが時を待たずして入ってきた。この地域を整備して植樹し、公園を造るという計画が東京府で動き始めた。それが現在の「神宮外苑」である。かくして建設は始まり本科生が授業をうけられる校舎が出来たのは大正8年4月、医学部と病院が完成し開院式が挙行されたのは大正9年11月6日であった。

余談であるが「また、奥田か」について。この奥田とは奥田義人のことである。日露戦後の不況のおりに陸軍が2個師団の増設を要求し、その財源確保のために「奥田案」なる財政縮小の標的になったのが伝染病研究所の移管であった。

陸軍がこの信濃町の土地を売却せねばならなかったのは、2個師団増設をするためであった。伝研移管と2個師団増設は同時に国会を通過している。「その陸軍の2個師団増師を実現するために売却した土地に北里柴三郎が医学部を造るというのは因縁めいている」と山崎光夫著「北里柴三郎（下） p 304で詳しく述べられている。

(3)恩賜財団済生会芝病院初代院長

恩賜財団には少々遡る経緯がある。明治44年2月11日明治天皇は窮民施薬救済に関し次のような勅語を発令し、自ら150万円を下賜された

「…………もしそれ無告の窮民にして医薬給せず、天寿を終うること能わざるは、朕が最も軫念^{しんねん}して措かざるところなり。すなわち施薬救療、もって済生の道を弘めんとす。ここに内帑の金を出し、その資に充てしむ。

卿克く朕が意を体し、よろしきに随い、これを措置し永く衆庶をして頼るところあらしめんことを期せよ」

この趣旨にそって当時の内閣総理大臣桂太郎大臣が「恩賜財団済生会」を設立して官民に働きかけ寄付を募り、2500万円が集まった。その寄付額の多寡は興味あるが割愛して、この診療事業を掌握する役割が北里柴三郎であった。最初は深川と本所に仮診療所を設けて庶民対象の診療が始まった（大正元年）

大正5年芝区赤羽（現港区三田1丁目）に済生会病院（敷地2万坪、建坪2472坪、200床）が開院し北里柴三郎は初代院長となった。（大正12年7月迄）

1917年（大正6年）64歳

大日本医師会結成され初代会長に就任する

北里が民間人となってから各種の団体から長になる要請が増えた。伝染病研究所時代に北里の講習を受けた各地の医師や団体の関係者は、相変わらず猛威をふるうコレラ、赤痢、チフス等の伝染病の撲滅と予防の徹底を求めている。開業医たちは健康保険制度に消極的で実行を食い止めたかった。医師会の起源は明治8年から始まっているが時々の勢力争いで統一的な力を発揮することが出来ないでいた。医界は政治的力量と医学的業績を備えた人物の登場を願っていた。就任を逡巡していた北里に副所長の北島多一が「所長が会長に就任しないことには事態が納まりません」と後を押した。この会は6年後大正12年医師法にもとづく日本医師会となり、現在に至る。北里柴三郎は初代会長に就任している。この他に北里柴三郎は日本結核予防協会理事長にもつき、貴族院議員にも任ぜられた。

1918年（大正7年）65歳 スペイン風邪第1派

- (1) 10月、私立北里研究所の財産を一切寄付して「社団法人・北里研究所」となる。円滑な事業承継を願っての組織変更である。
- (2) 11月、「大日本私立衛生会」の会頭に任ぜられる。

人的にも物的にも公人としての活躍が期待され、それに応えて業績を残している。

1919年（大正8年）66歳

(1)6月11日長與又郎の訪問を受ける。長與又郎の略歴

長與又郎は長與専齋の三男であり、森村財閥の森村豊の令嬢との結婚の媒酌を北里柴三郎がつとめている。長與専齋（1902年没）は北里柴三郎の大恩人である。[1904年](#)（明治37年）12月に東京帝国大学医科大学を卒業する。ドイツのフライブルク大学に留学し、帰国後、東京帝国大学の病理学教授となる。夏目漱石が病死した際には、未亡人夏目鏡子の希望で、漱石の遺体を解剖した。（漱石の主治医は兄の弥吉、長與胃腸病院院長である）

伝染病研究所長や医学部長を経て、1934年（昭和9年）東京帝国大学第12代総長に就任する。1938年（昭和13年）文部大臣荒木貞夫から総長官選案を示されるも、大学の自治を守るために戦い、荒木の案を撤回させて総長を辞任する。同年12月28日、東京帝国大学名誉教授の称号を授与された

また癌研究所や日本癌学会を設立し、癌の解明に努力する。父の遺志を継いで、公衆衛生院や結核予防会をも設立した。自ら予言していた通りに癌となり、1941年（昭和16年）8月15日、死の前日に、医学への貢献により男爵となる。享年63。

東京帝国大学野球部長も務め、部の寮である「一誠寮」の看板は長與又郎の揮毫による。この時、「誠」の字の右側の「ノ」の画を入れ損なったが、これを指摘した選手たちに「最後のノは君たちが優勝したときに入れよう」と語ったという（東大の[六大学野球](#)最高位は1946年春季の2位であるため、以後も「ノ」の部分の欠けたままとなっている）。

長與又郎の訪問は伝染病研究所の所長就任の挨拶であった。「この26日に所長就任の招待会を開く予定です。ぜひ、先生に参列していただきたいのです。他の研究員の方々も誘ってください」との依頼であった。

出席した北里柴三郎の祝辞はマスコモにも注目されていたが、長與専齋以来の関係を述べ招待を謝辞して「伝染病研究所の発達は、創立者たる私の衷心より喜悅に堪えぬ次第である。今回ここに敬愛せる長與博士が新たに所長の印綬を受けられたるは、衷心より甚大なる歡喜をもってこれを迎えるものなり。歴代の所長其人を得たることは勿論なり。されども長與君は殊に其の適任者たるを信ず。願わくば、自愛もって責務の大なる盡されんことを」

長與又郎の伝研所長の就任は北里研究所との対立を和らげたのだった。また、北里柴三郎の積年の不和に一応の決着をみたのである。山崎光夫著「北里柴三郎（下） p 308

(2)スペイン風（新型インフルエンザ）ワクチン開発競争

NHK BSプレミアム2020/08/26「英雄達の選択」が放映されて、ワクチンの開発に政治家がからむことの弊害を訴えたが、その例として北里柴三郎と長與又郎とが登場した。スペイン風の流行状況はグラフの通りであるが、第2派に向けて北里研究所と国立伝染病研究所とがワクチン開発競争（共に失敗）をしたこととの内容である。先ず北里研究所が製造に踏み切ったのは大正8年11月である。時系列で示すところの年の6月には上記(1)のように両者の関係は対立が和らいだばかりである。

大正9年2月には土屋清三郎議員が次のように国会質問をしている。

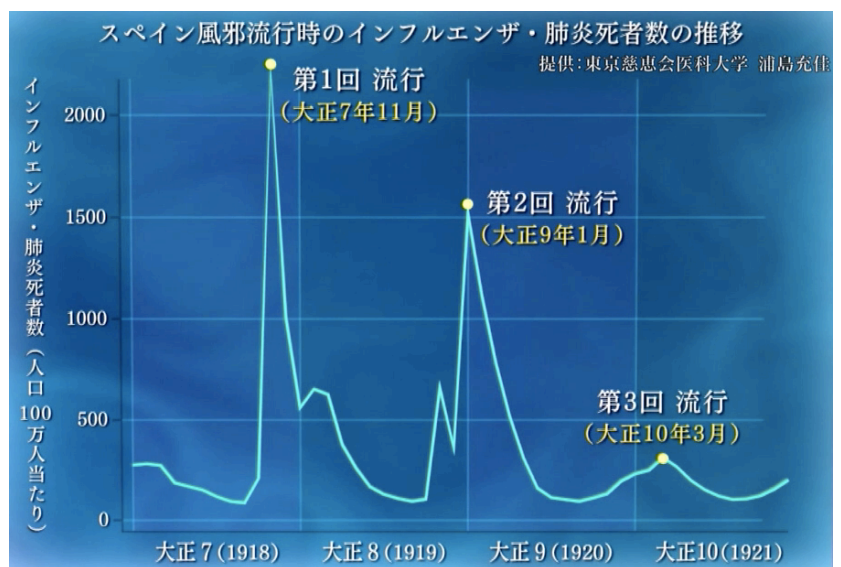
「北里研究所では病原を確定して

（インフルエンザ菌）ワクチンの製造を行っているが、政府の伝染病研究所では病原を不明としたまま混合ワクチンを出した。政府はどちらの予防ワクチンを認めるのか明らかにしてほしい」

NHKの解説によると当時の顕微鏡ではウイルスは発見することが出来ず、インフルエンザ・ウイルスが発見されたのは14年後であるとのこと。従って両者の製造したワクチンは効果がなかったことになる。500万人の人がワクチン注射をしたそうである。（当時の人口は約5666万人）第2派の罹患患者は第1派より少ないが、死者数は5倍も多かった。

3年間では人口の43%死者は50万人越えると報道された。

報道にはなかったが何故収束したのかを調べてみた。「猛威を振るったスペイン風邪は、1920年が過ぎると鎮静化した。それは徹底した予防策の実行だけが理由ではない。ウイ



ルスが日本中に拡大し、多くの人がスペイン風邪にかかり、生き残った人々が免疫抗体を獲得したため収束した」

今、我々が直面しているCOVID-19の収束も同じような過程を通るのであるだろうか？

1920年（大正9年）67歳

ここで慶應義塾大学医学部創設関連をまとめる（同校沿革より）

1917年（大正6年）11月四谷区信濃町の陸軍用地を購入

12月、医学科設置認可される。北里柴三郎が初代の医学部長となる

さきに明治6年から同13年まで塾内には医学所が開かれていたことがあり、
創立60年にあたって実現、まず予科の授業を三田山上で開始した。

1918年（大正7年）医学科付属看護婦養成所設置

1919年（大正8年）医学科本科1年始業式を四谷の新校舎で挙行了した

1920年（大正9年）文学・経済学・法学・医学の4学部からなる総合大学へ

11月6日、医学部開校ならびに大学病院開院式

木造2階建、196病室、約400病床の大学病院は、本邦随一との評があった。

（以上www.med.keio.ac.jp/about/history/1917.htmlより引用）

文学・経済学・法学の3学部からなる3年制の「大学部」の発足は1890年（明治23年）で日本最初の私立総合大学が誕生していた。1917年（大正6年）は慶應義塾創立60周年

病院の設計には北島多一が詳細な指示をしていた。その内容は以下の4点である

- ①堂々たる建築を避けること。入口は病人の出入りに便利にする
- ②診療各科の連絡をよくし、患者が各科の診療室を訪るに便利にする
- ③各教室、教授、助教授、助手等が互いに仲良く一致して平和な教室を造るようになる
- ④共同研究室を造り、互いに助け合うようにし、基礎科の教授、助教授にも来て指導してもらう。（総合的研究の精神、学内共同一致の気風を醸成しようとしている）

北里精神が生き生きと表れている。患者に寄り添った診療を目指している。

この病院エトスは1923年（大正12年）9月の関東大震災時の対処に表れている。

「首脳者より指揮命令が出る前に教職員学生は相い共に進んで救護・消化の任にあたり、消化に成功。加えて火災にあった9病院等の罹災傷病者救済のため、診療・治療を引き受け、総計32万4000人を超える患者を診察」（上記www）

開院式の北里柴三郎の有名な演説

「予は福沢先生の門下では無いが、先生の恩顧を蒙ったことは門下生以上である。故に不肖報恩の一端にもならんかと、進んで此の大任を引受けたのである。我等の新しき医科大学は、多年医界の宿弊たる各科の分立を防ぎ、基礎医学と臨床医学の連繫を緊密にして一

家族の如く、全員挙って斯学の研鑽に努力するを以て特色としたい」（三田評論第281号 大正9年）

1921年（大正10年） 68歳

11月4日、原敬暗殺事件、北里柴三郎は伝研移転問題で当時内務大臣であった原敬に直談判をして、よい返事をもらっていた。その後の交際については不知。

12月13日、ワシントン会議で日・米・英・仏の4カ国条約調印、日英同盟破棄される。

1922年（大正11年） 69歳

第一次世界大戦敗戦国のドイツで破壊的なインフレーションが起きる。ドイツマルクの交換価値が1ドル162マルクから7000マルクに急落した（8月）その後マルクの急落は続く 1923年7月、1ドルは160,000マルク、11月1日、1300億マルク、11月30日4兆2000億マルクまで下がった。

北里柴三郎はコッホ未亡人のことが心配になり、15,000円（750\$）を送金して援助した。（現在価値1,000万円、10万ドル）。後年コッホ夫人は同家の家宝ともいべきコッホの肖像画（1891年グリユフ作）を送ってくれた。北里柴三郎は非常に喜び今も大切に北里研究所に保存されているという。恩顧を忘れない終始一貫の精神である。

1922年（大正11年） 69歳

(1)7月9日、森鷗外逝去。

北里との医学上の論敵であり続けた森鷗外であったが、北里には一人の恩人でもあった。北里が6年半の長きにわたりコッホに師事できたきっかけを作ってくれたのが森鷗外であり、北里柴三郎はその恩を生涯忘れることはなかった。

森鷗外は生涯咳と痰に悩まされた。小塩 節さんは近著の「随想 森鷗外」で以下のような温かいまなざしを送っておられる。然り名文なりをもって紹介する

「若い時から実は肺結核による痰が多かった。そしてそれは年をとるにつれて深刻になっていった。明治43年2月10日の日記にこうある。『熱。是日痰錆色なり』結核による痰であることの自覚はあった。しかしその病名を誰にも（妻にも）告げることはしなかった。鷗外は断固としてあらゆる医療診断や薬品服用を拒否し続けた。病臥したままの体調がますます悪化したので6月29日にまったく初めて医師の診断を受けた。長男於菟（おと＝オットー）の中学時代の同窓生で、賀古の部下であり賀古の姪の夫でもある額田晋だった。この額田医師が萎縮腎と結核との病因を確認しつつ、病人鷗外の懇請を受けて、腎臓についてだけ診断書をつくり世に発表した（その後33年間秘密を守った）7月9日朝7時、鷗外は自宅で静かに息をひきとった。60歳だった。臨終の前夜、静かに病臥していた鷗外が、突如太く高い大声を出して『馬鹿らしい、馬鹿らしい』と叫んで、また静かに眠ったと、付き添いの看護師が伝えている。その声の大きさに驚いたという。鷗外の家族の人たちは、看護していた女性の思い違いであろうと言って一笑に付したが、今生のすべてを虚しく馬鹿らしいと断じたのではなく、死を前にして、うつつの夢のような半覚醒の中で

あれこれと、おのれと社会、世界との営みに心を悩ます自分のさまを、そう断じたのだろうと私は思う。今さら思い残すことはないではないか。あれをこうし、これをああすればよかったと思わずにいられない自分の心の乱れを、馬鹿らしい、と自ら断じ叱ったのではないだろうか。平静鏡の面のごとくなくて、いいではないか。思い悩む愚かさは、バカらしいのである。このおのれへの叱咤の一声をもって彼の煩惱はふっきたのだろう。略」
(前掲著 p 111~112)

(2) 11月17日~12月29日、アルベルト・アインシュタイン来日、コッホの時と同じように熱狂的に迎えられた。

1923年（大正12年）70歳 関東大震災

11月、「日本医師会」の初代会長となる。

「財団法人・日本結核予防協会」の理事長に就任

ここで医界諸団体への貢献についてまとめる

国家的な見地に立って考えるとき、公衆衛生の向上と社会事業の普及に尽力した北里柴三郎の影響力は、はかりしれないほど偉大である。日本における衛生法令の根幹となった伝染病予防法（明治30年公布）の制定、大日本私立衛生会での活躍、日本結核予防協会の設立、恩賜財団済生会芝病院初代院長として尽くした救済民事業その他に関連している

内務省が所管していた「中央衛生会」（明治12年設置）には医学の立場から常時意見を発表し大正9年には石黒 忠憲の後任として本会会長を務めた（大正14年まで）

大日本私立衛生会は衛生に関する日本最初の公共団体で「全国民の健康を保持改善するために討議研究し、衛生上の知識を普及し、公衆衛生上の施設を助成する」目的で設立された（明治16年）創立と同時に、内務省衛生局の職員だった（東大医科大学卒業して入局）北里はその審議委員となり、留学に際しては同会からドイツの衛生制度の調査を依頼され、ドイツ滞在中には同会代表として国際的な医学大会への出席を義務づけられ、ロベルト・コッホ博士に6年半師事し、帰国後は同会での経営を引き受け、同会が社団法人となる（大正7年）には会頭となり、生涯の最後まで同会を統率した。

北里は衛生と社会政策に関する立法には殆ど関与したが、伝染病予防法のほか特に功労が大きいものに、ハンセン病と結核に関する法律がある。ハンセン病予防法は明治40年、結核については明治35年から予防及び撲滅を訴え大正8年「結核予防法」が公布され、コッホ来日の明治41年「日本の医師も将来結核の予防に努力しよう」と申し合わせ、大正元年「日本結核予防協会」が誕生した。その後大正12年には「財団法人」となり会長に渋沢栄一を招き、北里は理事長となって、日本各地を廻って府県ごとに結核予防協会を設立させ、これを中央の予防協会に連結させた。そして結核予防の社会的施設を充実させていき。終身この運動を指導した。その結果、北里の死後になるが、国を挙げての予防対

策が推進され、ついには皇后陛下の令旨にもとづいた財団法人「結核予防会」が設立された（昭和14年）

1924年（大正13年） 71歳

1月28日 - 日本皇太子結婚記念により東京市の上野公園・上野動物園が宮内省より市に下賜、上野恩賜公園・恩賜上野動物園となる。

2月、北里は男爵になった。天皇のご成婚を慶賀して日本赤十字社社長と北里柴三郎の二人だけの受爵であった。この祝賀の席上、北里は「今回の恩命はわれら民間学徒に下されたもので、自分は最年長者の故をもって男爵を拝受するの光栄を担ったのである」と挨拶し、その後、何らの功績がない子孫にまで爵位を継承させるのは不当だとして「一代華族論」を唱えた。

4月、第1回選抜中等学校野球大会が開幕。

1925年（1925年） 72歳

6月、長男俊太郎心中事件、慶應義塾大学医学部辞任の意向あるも学生たちから留意さる

1926年（昭和元年） 73歳

5月、田淵の妻に続いて、1週間後に妻の帟が他界する。山崎光夫著「北里柴三郎（下）p314に感動的な場面が記載されている。田端 重晟（たばた しげあき）は真に北里柴三郎の右腕であった。そして福沢諭吉の右腕でもあった。

大日本医師会会長の要請があった。

1928年（昭和3年） 75歳

5月、慶應義塾大学医学部部長を勇退し弟子の北島多一に継承する。医学部顧問となる

6月4日 - 張作霖爆殺事件（満洲某重大事件）

8月27日 - パリ不戦条約調印（日本を含む15か国が署名）。日本では「人民の名に於て」の字句が政治問題化。

11月10日 - 昭和天皇の即位の礼挙行 11月14日 - 大嘗祭挙行、北里柴三郎「大礼記念章」を授与される。

1929年（昭和4年） 76歳

11月、越後鉄道疑獄事件、北里柴三郎の同郷の政治家文部大臣小橋一太が逮捕される。北里は彼の無罪を信じて法曹界の権威花井卓蔵に弁護を依頼する。1930年3月起訴され一

審判決懲役10ヶ月執行猶予2年、1931年8月控訴審で無罪の判決。北里柴三郎の逝去は6月13日、小橋は白日の身を報告できなかった。小橋は昭和12年東京市長となって復権する

1931年（昭和6年）78歳 6月13日逝去

悪性の中耳炎を患い顔面神経麻痺や発声困難に陥り公的活動は不自由になったが、課せられた日程は無難にこなした（強い使命感）。6月11日慶應義塾大学病院の歯科を訪れ治療を受けた。この時、元塾長鎌田栄吉や同郷の政治家小橋一太（控訴審中）と話を交わした小橋に対して「わたしは君の潔白をしんじている」と肩に手を置いて言った。「清浦奎吾伯爵も応援している。捲土重来の勢いをもって政界に雄飛したまえ」と激励した。

「この日の翌日はいつもの通り北里研究所に出向いていた。所員はドンネル（雷）にあわぬようにそれぞれ緊張感をもって職務に従事していた。北里は定刻に帰宅した。（6月12日）その翌日13日早朝、家政婦がいつまでの起きてこない主人を不審に思い、日本間の寝室を見にいった。北里柴三郎は布団のそばの畳の上に寝間着姿のまま倒れていた。急遽、女婿の慶應義塾大学病院内科教授、石田二郎が呼ばれ治療にあたったが、すでに息絶えていた。起死回生を願って心臓にアドレナリンを注射したが効果はなかった。脳溢血だった。

田端は部屋に安置された亡骸に手を合わせた。後悔のない人生だったのだろう。安らかな顔つきだった。巨勢墜つの報に、弔問客がひきもきらず訪れる。田端は柴三郎のそばを離れ、庭先に出た。一人になりたかった。声をあげて泣いた。誰はばかりず、声がかれるまで泣いた。そのとき、ふと額紫陽花が一輪咲いているのが目に入った。方形の青紫色の萼で額縁のように縁取られた中央には紫色の小さな花が密生していた。どの形が破傷風菌の形に似ているような気がした。破傷風菌は北里研究所のシンボルマークでもある。北里の原点だった。額紫陽花はいかにも北里の死にふさわしい花に思えた。田端にはそこに北里がいるような気がした。雷（ドンネル）を落とし、好き勝手に生きた人だった。それもいまは亡い。「博士……」（北里を最初に博士と呼んだのは田端であった）田端は掌を立てて紫陽花に小さく呼びかけた。そして、佇んだまま、あの雷（ドンネル）の返辞がないかいつまでも耳を澄ませていた。」山崎光夫著「北里柴三郎（下） p 321～322。上記（）ないの説明は筆者である

おわりに

ペストから始まり北里柴三郎に思い馳せ3回に分けて連載をした。これは私自身のための読書録であることをお断りしたい。私は学者でも、その道の専門家でもない平凡な市井人にすぎない。新しい発見をしたわけでもない。ただ、どの本にもない工夫が一つある。それは年代記にしたことである。来年から北里柴三郎に関する著作が数多く出版されるであろう。また、下記の優れた参考文献のどれを読むにしても、この小稿を一瞥することはそれらの本の理解を深めると信じている。

これらの優れた先達の著作を読んで感想を述べる資格もないが、北里柴三郎が福沢諭吉に邂逅しなければ現在の学校法人北里学園・病院・研究所、そして慶応大学義塾大学医学部・病院も存在しなかったかも知れないと思った。人と人がつながり、志を同じくしたことで大きな歴史的果実が多くの人々の命を救ってきた証を見ることができた。

惜しむらくは、日本の近代史の概説を併記して記述することができなかったことである。

最後の謹んで両校の理念を抜粋記載する

北里学園の建学の精神は、学祖が生涯を通して顕現した言行である、「開拓」「報恩」「叡智と実践」「不撓不屈」としており、我々はこれらを「北里精神」と呼んでいる。北里精神のなかでも、学んで得た知識と技術を実践の場に活かし社会に還元するとの「叡智と実践」は、本学に集うものすべてが、実学教育の実践とサイエンスの追求という形でその理念を共有し、日々の教育・学習、研究、診療、社会連携等に込めている。

(同学園ホームページより引用)

慶應義塾の目的

”気品の泉源、智徳の模範……以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり”

福沢諭吉は学問を修める過程で、「智徳」とともに「気品」を重視し、社会の先導者にふさわしい人格形成を志しました。福澤が門下生たちにその志を託した「慶應義塾の目的」と呼ばれる一文があります。

「慶應義塾は単に一所の学塾として自ら甘んずるを得ず、其目的は我日本国中に於ける気品の源、智徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家、処世、立国の本旨を明らかにして、之を口に言うのみにあらず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり」

これは慶應義塾の真の目的とすることを最も簡明に言い表した一文として知られています」(同校ホームページより引用)

参考文献

- ①「北里柴三郎(下)」山崎光夫著 中央公論新社・文庫本 初版2007年10月
- ②「北里柴三郎」熱と誠があれば・福田真人著・ミネルヴァ書房・初版2008年10月
- ③「北里柴三郎」長木大三著・慶應義塾大学出版部・初版1986年4月
- ④「北里柴三郎とその一門」長木大三著・慶応通信・初版1989年6月
- ⑤「北里柴三郎の生涯」砂川幸雄著・NTT出版・初版2003年3月
- ⑥「明治21年6月3日」鷗外(ベルリン写真の謎を解く)
山崎光夫著・講談社・初版2012年7月
- ⑦「随想 森鷗外」小塩 節著・青娥書房・初版2020年8月1日
- ⑧「原敬日記を読む」栗田直樹著・成文堂・初版2018年2月20日

「パリ通信」その後、古賀さんは8月下旬にパリに戻られました。その様子はパリ通信に追記しましたので、ご覧ください。日本とパリの様子の違いがよく分かります。